

台耕地遺跡78号住居跡（第36図33）のように胴部下端に及ぶ場合もある。

以上のように、桜沢窯跡の土器群は他の窯跡や遺跡と同様に形態的变化を示す反面、高台付坏に代表されるように恒常に生産されてきた坏に高台を付着し、椀の形態を作り出すという新たな土器生産の形が打ち出されている。既に在地産の須恵器には灰釉陶器等の影響がみられ、それらが新しい土器を生む要因の一つと考えられる。また、桜沢窯跡のように平坦な段丘面に窯が構築されるという行為は、古代的土器生産が崩壊して生産体制の分散化が促されていった結果といえよう。しかし、一方では、折原窯跡のように丘陵の斜面に窯が構築されて生産が行われる場合もあり、過渡期的な様相をも垣間見ることができる。また、土器生産の分散化は、古代の流通形態から中世的な流通形態への移行を促すもので、台耕地遺跡のような製鉄などに関連した集落もそうした流通の中に組み込まれた集落の一つと考えられる。

桜沢窯跡の年代については第36図に示した土器群から10世紀第1四半期と考えたい。桜沢窯跡と同時期と考えられるものには、台耕地遺跡78号住居跡や西浦北遺跡4号住居跡などがあるが、西浦北遺跡4号住居跡からはK-90号窯式の灰釉陶器が出土している。一方、台耕地遺跡78号住居跡に先行する同77号住居跡からも上記の灰釉陶器が出土し、集落によって灰釉陶器は年代的に異った出現をする。K-90号窯式には年代に幅があるようであり、出土例からは9世紀第四半期～10世紀前半に集中する傾向がある。また、新開窯跡の出土遺物については従来10世紀後半と考えられてきたが、図中に示した土器群の範疇で理解できることから10世紀前半、折原窯跡については、桜沢窯跡とほぼ同時期と考えられる。

3. 文字瓦「上」の逆字について

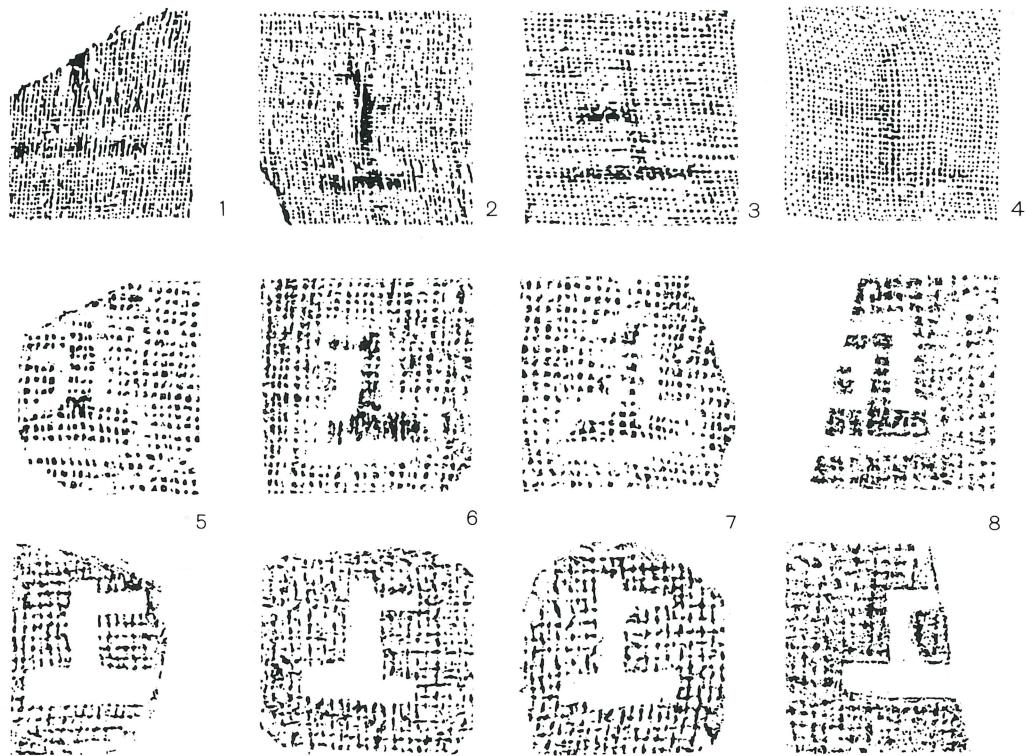
桜沢窯跡から出土した文字瓦は、1号窯3点、2号窯5点、2号溝1点の合計9点である。いずれも平瓦凹面中央部に模骨されたもので、「上」の文字が逆字となって「土」となったと考えられる。文字瓦には郡、郷、人名などがあり、出土地点や地域によってその記名方法・内容は様々である。本稿では、桜沢窯跡から出土した文字瓦を中心にその特色や生産体制、同時期と見られる武藏国分寺塔再建期の文字瓦との関連性などについて触れてみたい。

出土した平瓦は、製作技法上、粘土板である粘土紐であるかは問題として残るが、ともに積極的に推せる根拠に乏しい。平瓦の多くは小破片で、その上風化が著しく、糸切りなどの調整前の痕跡は確認できないのが現状である。しかし、破片の中に横方向に対する割れや鱗が入る瓦があることから、粘土紐による一枚造りの可能性が高いことを指摘しておきたい。瓦の側面や端面は、中心部分に比べて厚く造られる傾向があり、凹面には布目、凸面には縄叩きが施されるが、凸面の縄叩きは比較的深くたたき込まれているものが多い。これは製作時において、粘土の乾燥が差程進行しない段階において叩かれた可能性を示すもので、中心部を叩き締めることによって粘土は側面や端部方向に押し出され、厚くなったものと考えられる。また、「上」の逆字は前記したように凹面中央端部寄りに表わされるが、出土した9点はいずれも布目との凹凸が浅い。したがって、製作台上に掘り込まれた文字瓦「上」の逆字は、掘り込みが浅く、ある程度強く叩かれない限り凹面の布目には表れないことが予想できる。以上のことから側面や端部の厚みは、模骨文字「上」を凹面上に浮き上がらせた結果に起因している可能性が高い。

「土」は、第37図の武藏国分寺例から「上」の逆字であると考えられる。第37図5～8の下段は各々の型を復元したものである。拓影図や復元型の5と8を比べると異なった型で製作されていることが確認でき、二種類以上の製作台によって生産されていた可能性がある。5～7は微妙に異なっているが、型の深さを考慮すると同一の型である可能性の方が高い。8は明らかに文字の先端が切れており、前者とは異なった型である。武藏国分寺例をみると、「上」の正字とともに逆字（第37図3・4）の存在が確認できる。桜沢例は文字の浮き上がっている部分に高さがないため、文字の周辺の布目を意識的に表現せず、文字のみを誇張するように拓影したため、やや違和感があるが、字体は国分寺例に基本的には類似している。現在のところ、埼玉県内では「上」の逆字の平瓦が出土する遺跡は桜沢窯跡以外では確認されていないが、胎土は寄居周辺の地域でみられるものと類似しており、末野の窯跡群で焼成された可能性もある。これに対し、武藏国分寺出土瓦の胎土は粒子の細かさや含まれる鉱物から南多摩や東金子地域に近く、色調も灰～黒褐色が主体である。また、「上」の文字の大きさは桜沢例は横縦とも2.2cm前後であるが、国分寺例は縦横3.3cm前後と約5割も大型であり、字体も桜沢例が丸味があるのに対して、国分寺例はやや直線的である。このように胎土や焼成において桜沢例と国分寺例は異なった様相を示しており、所見からは生産地の共通性は認められない。

武藏国分寺から出土する逆字の瓦は「上」、「加上」「児」、「男」、「棒」、「豊」などがあり、いずれも郡名を表わすものと考えられている。国分寺出土の文字瓦（篆書きを除く）に占める逆字の割合は一割弱であるが、仮に郡名を表わすものとすると現在の県北地域の名称が多い。武藏北部に逆字が多い理由は明らかではないが、一つの可能性として瓦工人の特徴が考えられる。国分寺の文字瓦は創建以降、南比企窯跡群、東金子窯跡群、南多摩窯跡群などの大規模な生産地で伽藍の修復に伴う差し替えなどに応じて焼成されたものとされている。上記の文字瓦についても各窯跡群で焼成された可能性を残すが、社会環境の変化などによって生産地点が分散し、主要生産地から離れた地域での生産の可能性が考えられる場合は、逆字などの不備が生まれることも否定できない。

武藏国分寺の塔再建以降の瓦生産については、不明瞭な点が多い。それは塔再建期を境にして瓦当文様の退化、生産の減少が急激に進むが、寺の区画溝の埋まる廃絶期との間に土器群との時間的な差が生ずる。その時間的な差が差し替え瓦などの補修で充てられたとしても廃絶期の瓦が存在しないことを考えると、国分寺関係瓦生産の殆どは既に9世紀代で終了したものとみられる。塔再建期以降、瓦が減少するのは、官窯であった南比企窯跡群、東金子窯跡群、南多摩窯跡群の衰退と寺院経営の縮小、寺院形態の転換化が大きな原因ではないかとみられる。桜沢窯跡や新開窯跡などのように二次的に後世に瓦が利用される例は少なくないが、塔再建期後に続く瓦の生産体制は明らかではない。県内でも古代的瓦の終末と考えられる新開窯跡出土瓦は、前述した須恵器や八坂前窯跡で出土する「大」の文字瓦の年代から9世紀後半～末頃とみられ、武藏国内での瓦生産は、10世紀に入る頃には終焉をむかえていたものと考えられる。



第37図 文字瓦「上」 1～4 武藏国分寺・5～8 桜沢窯跡

引用・参考文献

- 市川 修 (1977) 『田中前遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告書 第32集
- 今関 久夫他 (1993) 『大里郡域の遺跡Ⅱ』『埼玉考古』第30号 埼玉考古学会
- 上原 真人 (1989) 『東国国分寺の文字瓦再考』『古代文化』12月号 (財)古代学協会
- 梅沢太久夫他 (1979) 『末野窯跡群および馬騎の内廃寺の調査』町史編さん調査報告 第4集 寄居町教育委員会
- 大塚 孝司 (1984) 『江ヶ崎貝塚・荒川附遺跡』 蓼田市教育委員会
- 荻野 繁春他 (1981) 『老洞古窯跡群発掘調査報告書』 岐阜市教育委員会
- 木津 博明 (1990) 『国分境遺跡』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第104集
- 木津 博明 (1992) 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(8)』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第132集
- 小淵 良樹他 (1982) 『宮ノ越遺跡』 埼玉県遺跡調査会報告書 第44集
- 埼玉県 (1984) 『新編埼玉県史・資料編3』古代1 奈良・平安
- 斎藤 忠他 (1989) 『静岡県の窯業遺跡』 静岡県文化財調査報告書 第42集
- 酒井 清治 (1984) 『台耕地Ⅱ』 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集
- 酒井 清治 (1987) 『埼玉県の須恵器の変遷について』『埼玉の古代窯業調査報告書』埼玉県立歴史資料館
- 酒井 清治 (1987) 『武藏国における須恵器年代の再検討』『研究紀要』第9号 埼玉県立歴史資料館